



vol.03

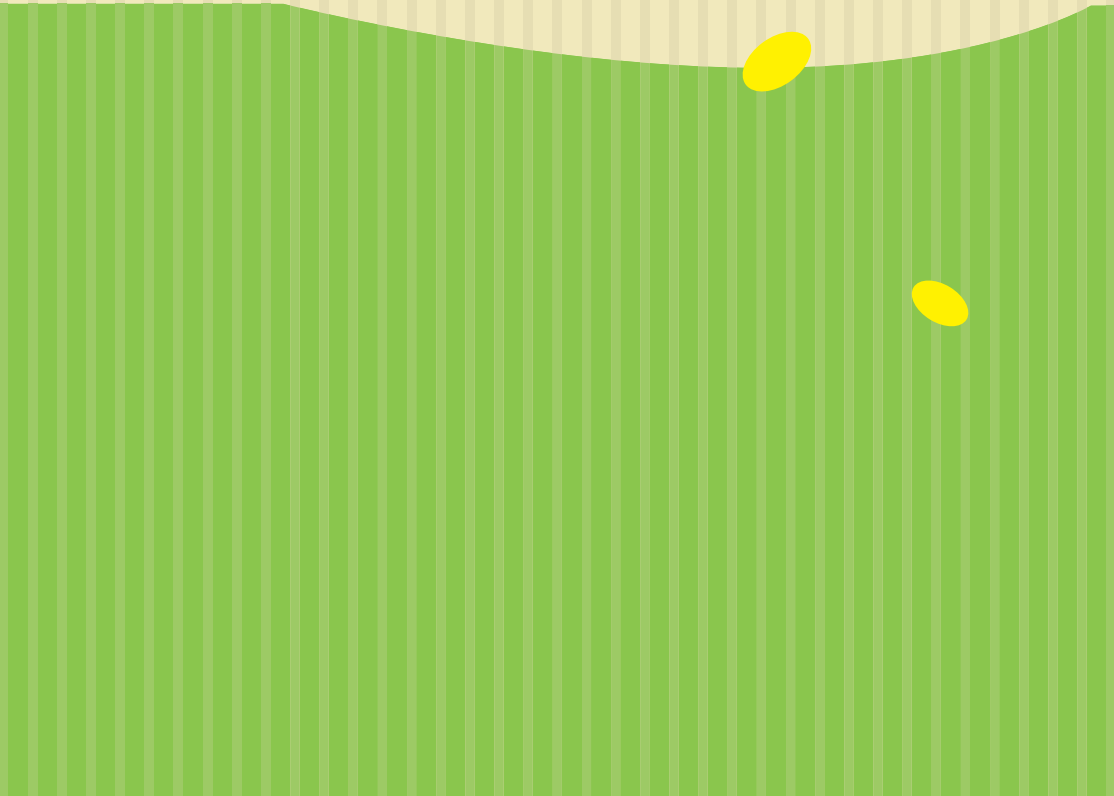
亜細亜大学  
国際関係学部編集



KaYa  
03  
亜細亜大学  
国際関係学部

国際関係・多文化  
フォトジャーナル

Asia University Faculty of International Relations



04 **ESSAY** **فتح يا سمير! (開けゴマ!)**  
アラビア語 千夜何夜物語(中)  
新妻 仁一

国際関係・多文化フォトジャーナル  
Faculty of International Relations, Asia University

12 **ESSAY** *Nature Watching*  
里山を歩いて  
考えさせられたこと  
中野 達司

20 **銅像よもやま話3**  
子どもの銅像  
高山 陽子

27 **ゼミナール紹介**  
前川ゼミ  
「ご自由にどうぞ」  
前川 輝光

32 **フィールドワーク**  
2015年  
夏季フィリピン フィールドワーク  
小張 順弘

42 **ゼミナール課外活動**  
3年ゼミ  
タイ、プーケット島でのゼミ合宿  
大塚 直樹+ゼミ生有志

51 **学部行事報告**  
多文化コミュニケーション学科  
アジア祭参加企画—多文化フェス2015  
大塚 直樹

## Contents



# 榎 かや とは



亜細亜大学内のゆうちょ銀行ATMの裏側に記念樹があります。それが榎の木です。この記念樹は、1941（昭和16）年の本学創立当初に植樹されました。先達に敬意を表わしつつ、半世紀以上にわたり本学の歩みを見守ってきた榎とともにグローバル化時代に挑戦してゆこうという国際関係学部の思いが本ジャーナル名の由来です。



亜細亜大学 国際関係学部  
〒180-8629 東京都武蔵野市境5-24-10

学部についての詳細は  
<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

『榎』はPDFデータでも閲覧いただけます。  
※亜細亜大学学術リポジトリから入手できます。

会に出席した後学生が決めることになっている。

ここで地域言語の選択手順について紹介しておこう。学科開設以来、新生が偏った情報に基づいて言語を選択することのないよう地域言語の担当教員が中心となって言語説明会を開催している。各言語一〇分程度、アラビア語、ヒンディー語など新生にとってなじみが薄いと思われる言語は、一五分程度を原則とし、言語の重要性、面白さ、学ぶメリット等について説明している。また学科設立の趣旨に基づき、六つの言語を二つのグループに分け、特定の言語に履修者が集中しないよう新生には第一希望と第二希望の言語を選択させている。二つのグループとは、アラビア語、ヒンディー語という希望者が限定的であることが予想されるグループ（グループA）とスペイン語、中国語、韓国語、インドネシア語という程度希望者が集まる

が今回の目的である。

二〇一二年の学科設立以来アラビア語の一年次初級登録者数は、三（二〇一二）一五（二〇一三）一〇（二〇一四）九（二〇一五）となっている。このうち一三年度、一四年度は、第一希望者の数を示し、一四年度は、第二希望者二名、一五年度は、第二希望者八名を含む数となっている。すなわち、一四年度は第一希望として選択した学生は、八名、一五年度は、一名であったことを意味している。第一希望と第二希望の言語を何にするかは、入学後に実施される地域言語説明

ことが予想されるグループ（グループB）である。そして第一希望と第二希望の組み合わせは、A・B、B・A、A・Aとし、B・Bの組み合わせを認めていない。インドネシア語は、初年度（二〇一二）にはグループAに入っていたが、新生の間でその知名度が比較的高いことが判明したため翌年からグループBに入れることとした。ちなみに初年度の初級登録者は、中国語三四、韓国語三〇、インドネシア語二八、スペイン語二五、ヒンディー語四、そして前述のごとくアラビア語は三となり、この年は、全員第一希望の言語に登録された。学科スタートの年でもあり、新生へのお祝いの意味もこめて第一希望言語への登録を優先させた結果であった。翌二〇一三年度は、第一希望として選択された言語が比較的うまく分散したため、この年も全員第一希望の言語に登録された。

しかし二〇一四年度と二〇一五年度



地域言語説明会。ここで得られる情報は重要だ

には、第一希望言語から第二希望言語への振り替えが行われた。アラビア語

# アラビア語 千夜何夜物語(中)

新妻仁一



東京ジャーミーの中央ドームとシャンデリア。中央ドームには、コーランの中でアッラーの唯一性を宣言した有名な第112章(純正章)の文言が書かれている

紛争、そして前近代的でかつ危険な宗教であるイスラームにつながる地域の言葉。アラビア語に付きまとうこの否定的なイメージを払拭し、学生たちにはアラビア語学習の意義、面白さを伝えるにはどうしたらよいのであろうか。前回提示したこの課題に答えるの

は、第二希望者二名、一五年度は、第二希望者八名を含む数となっている。すなわち、一四年度は第一希望として選択した学生は、八名、一五年度は、一名であったことを意味している。第一希望と第二希望の言語を何にするかは、入学後に実施される地域言語説明

は、第二希望者二名、一五年度は、第二希望者八名を含む数となっている。すなわち、一四年度は第一希望として選択した学生は、八名、一五年度は、一名であったことを意味している。第一希望と第二希望の言語を何にするかは、入学後に実施される地域言語説明



『チイとゲンの地域言語の旅』である。チイとゲンは、チイキゲンゴ(地域言語)から誕生した旅が大好きな双子の兄妹であり、DVDは、この二人の旅を通じて各地域の文化、歴史、言語の仕組み、音声などについて知ることができるとなっている。

このアンケートでどの年度についても比較的是っきりと選択理由として確認できるのが「他大学では学べない」という理由である。本学のアラビア語教育に対する先見の明については、前号で指摘したが、新入生は、アラビア語の学習が他大学では得られない貴重な付加価値を自分自身につけることになることを理解しているといえよう。

この調査から概ね以下のことが指摘できるだろう。新入生は、第一希望として第二希望として、アラビア語をアラブ文化の理解、イスラームの理解といった何か具体的な目的と結び付けて選択しているというよりも他

の場合、二〇一四年度、スペイン語から二名、二〇一五年度には、やはりスペイン語から三名、そして韓国語から五名が振り替え登録された。アラビア語とヒンディー語は、履修者を一〇名前後と想定している。この数は、履修者の適度な分散化を通じて学科の特色および開設意義を明らかにするためである。開設から四年目を迎えたが、グループAとグループBの組み合わせによって第二希望言語が履修言語となった学生たち、事実上アラビア語とヒンディー語に振り替えられた学生であるが、その後の学習状況を見ると、彼らの学習意欲がこの振り替えによって大きく失われるということはなかった。

では彼らはなぜアラビア語を選択したのであるのか。第一希望か第二希望かを問わず、アラビア語と申請用紙に書いた理由を尋ねてみた。複数回答を可とし、( )内は、文書、または口頭で回答した履修生の数を示している。

二〇一三年度は、アンケート調査をする機会を逸してしまっていたが、その後、履修生に確認してみると「先輩に相談して」が一番の選択要因となっていたようである。先輩に相談してという回答については、入学後、キャンパスを離れて実施される二泊のオリエンテーション(本学では出会いの広場と呼んでいる)がその良い機会になっていた。しかし二〇一五年度の場合、登録は、説明会終了後、出会いの広場に参加する前となったため、表に示されているように先輩から情報を得る機会はほとんどなかったと考えられる。

また二〇一五年度のアンケートでは「説明会を聞いて」という項目を落としてしまったためゼロとなっているが、「面白そう」(二〇一二年、二〇一四年度ではなかった項目)という回答はおそらく「説明会を聞いて」か「紹介DVDを見て」と関連性がある。



元気な双子、チイとゲンと旅ができるDVD

大学ではなかなか学習できない言語としての価値、魅力にひかれて選択している。また説明会や紹介DVDで提供される情報はそれなりの役割を果たしているが、先輩からの情報は、それ以上に大きな影響を与えている。

この分析から一つの疑問が生じる。それは、本稿の冒頭で述べたようにア

ラビア語には、紛争、そして前近代的でかつ危険な宗教であるイスラームにつながる地域の言葉という否定的なイメージが付きまわっているはずであるが、果たしてこれは現実をきちんと反映したものであるのかという疑問である。アラビア語以外の言語を希望した学生たちに「何故アラビア語を選択しなかったのか」という問いかけをしていないため、明言することはできないが、少なくともアラビア語を選択した学生たちにとっては、言語選択においてこのイメージはそれほど大きな壁にはなっていないということであり、さらに言えば、このイメージを意識するほど彼らは、まだアラビア語に関連する地域の歴史や文化などについて学んでいないと言えるだろう。言い換えれば彼らは、中東の文化、また歴史や宗教についてよい意味で無頓着なのである。それならばこの無頓着さと希少価値としてのアラビア語という意識を適

〈表〉アラビア語を選択した理由

選択理由	2012(2)	2014(9)	2015(8)
説明会を聞いて	1	3	0
アラブ世界への関心	1	2	0
イスラームへの関心	1	1	1
他大学では学べない	2	6	2
紹介DVDを見て	0	1	1
友人、先輩に相談して	0	3	0
面白そう	0	0	3

ると考えている。「紹介DVDを見て」とは、説明会の前に、地域言語に関する基本情報を提供するために作成し、二〇一三年度から配布が始まった



『アル・アラビー(アラブ人)』本学図書館で読むことができるアラブ世界を代表する総合誌



邪視から守ってくれる護符、ファータマの手が描かれたドア

切なプログラムを準備することによって積極的な学習意欲の向上に導くことが我々教員の役目となるであろう。アラビア語を選択しなかった学生たちの背景にある要因を分析することも重要

だが、それ以上に、アラビア語を選択した学生たちの素直な感覚を受け入れることがより重要であるということである。

あえて学生たちが懸念を示している点について指摘するとすれば、それは、表には示さなかったが、二〇一五年度のアンケートで八名中五名がアラビア語のイメージとして「難しそう」と答えた点であろう。どの言語にも言語独特の難しさがあるわけだが、これまでの履修生に聞いてみてもこの「難しい」という言葉がアラビア語について語る時の最も適切なキーワードとなつて彼らの間に定着していることが感じとれる。適切なプログラムとは、難しさを理由に学生の学習意欲を低下、喪失させるのではなく、それを克服する喜びにつなげるプログラムでなければならぬということである。では多文化コミュニケーション学科のアラビア語の授業は、具体的にどのようなプログラムに基づいて運営されるべきであろうか。

アラビア語は、他の地域言語に比べると導入のための授業に多くの時間を

割かざるをえない言語であるということはこの言語教育に携わる者の一致した意見であろう。右から左へ表記される文字、これまで使ったことがない発声器官を活用する発音、これらは、履修生の多くがまず最初に直面する壁であろう。単独で表記される場合と連結して表記される場合、連結できる場合とできない場合、文字の表記だけをみても慣れるまでにある程度の時間を必要とする。また舌や歯、口蓋、咽頭、声門など人体の発声器官をフルに活用する発音、日本語は当然のこと、英語学習においてもほとんど使用することのなかった発声器官を意識するときの戸惑い、発音の壁を乗り越えるかどうかは、その後の学習意欲に大きな影響を及ぼす。筆者が始めてアラビア語と出会った一九七〇年代、ほとんどの教育現場で使用されていたテキストは、

『An Introduction To Modern Literary Arabic』(David Cowan, Cambridge



ンの著書に書かれているthe glottal stopという用語を代わりに発音するという笑い話もあった。しかし現在、学習者にとって高い壁であった発音の問題もアラブ人講師の指導、またテレビやラジオにおけるアラビア語学習番組の充実、そしてインターネット上のア



平和な時代のシリア北部の村。祭りでダブカ(横一列になり、手をつないで地面を踏みしめる踊り)を踊る

ラビア語学習教材の活用などによって比較的楽に乗り越えられるものとなってきた。文字と発音、この二つの壁を乗り越えた履修者がその後継続的に集中力を維持し、学習意欲を高めていくために何が必要であろうか。本稿の冒頭に示



ダマスカスからバスで一時間ほど。岩山に隠れたマールーラ。アラビア語の前の国際語であるアラム語が今でも使われている村として知られる

した課題に戻ってしまったが、それについては多文化コミュニケーション学科における地域言語の役割とともに次回にまとめてみたい。

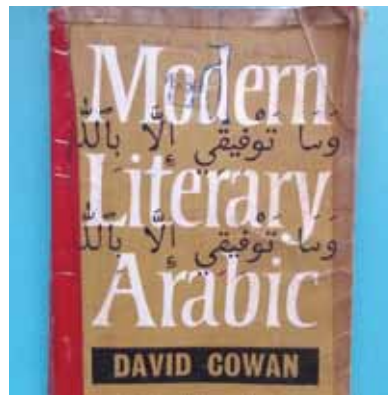


結婚式に招かれた楽団。ナーイ(葦のたて笛)、カーヌーン(台形状の弦楽器)、バイオリンで古典音楽を奏でる



本学で教えているナクシュバンディー先生はアラビア語教育の専門家。中身の濃い授業に学生たちは引き付けられる

University Press)であった。当時日本語で解説された適切な入門書はなかったのである。アラビア語の文字は、すべて子音であるが、発音に関して著者のコーワンは、「These consonants



コーワンの文法書。皆これで鍛えられた伝説的一冊

which are very difficult for English-speaking people to pronounce should preferably be learnt from Arabs」と書いてある。英語圏で学ぶ学生にとってとにかく発音が難しいからアラブ人から学び取ってくれと言っているのだから。こうなると当時アラブ人と簡単に知り合う機会もない我々日本人の学生にとって正しい発音を習得することは夢の世界の話となる。ハムザと呼ばれる声門閉鎖音が出てくると、コーワ



ヨルダンの街道の素焼きの水瓶



中東の伝統的木彫細工。ナツメヤシの前を通るロバとラクダのキャラバン



**本** 年（二〇一五年）四月の好  
 日、相模原市と八王子市にま  
 たがる里山地域を同好の仲間と歩い  
 た。主たる目的は野生生物の観察で  
 あったが、新緑萌ゆる山々を眺め、そ  
 してその中をウグイスなどの野鳥の囀  
 りを聴きながら歩いただけでも、日頃  
 屋内にこもっている身には、なかなか  
 のものであった（写真1）。

動物（脊椎動物）に出くわすなど  
 いうことは望むべくもなく、木の幹を  
 這うトカゲ類を一度見かけたのみで  
 あったが、それでもイノシシの足跡と  
 おぼしきものは見かけた。植物につい  
 ては、タンポポ類（写真2 至近距離  
 でカントウタンポポ〔在来種、右側〕  
 とセイヨウタンポポ〔外来種、左側〕  
 の揃い踏みと思われるが、後者は雑種  
 の可能性もあり）やスミレ類（タチツ  
 ポスミレ 写真3）などのお馴染みの  
 ものは勿論のこと、この季節に花を咲  
 かせる種を、珍しいものを含め、いく



# 里山を歩いて 考えさせられたこと

中野達司







つか観察することができた。先ずはそれらの紹介から。

**写** 真4はフデリンドウ（筆竜胆）。竜胆と聞くと秋に咲く花を思い浮かべるが、これは春に咲く種である。シユンラン（春蘭）（写真5）はその名もまさしくこの季節のものであるが、薄い黄色の花を咲かせ、近くではチゴユリ（写真6）も可憐にうつむいていた。イチリンソウ（写真7）が見られたと思ったら、負けじとニリンソウ（写真8）もジロボウエンゴサクを伴って群生していた。さらに毒蛇が鎌首をもたげているかの如くの、マムシグサ類の何某様（写真9）が周囲を睥睨していた。他にもクサイチゴ、ヤマツツジ、ボケ、ヤマブキなど、春に開花する植物の数々（含む外来種）の野生の姿に接することができた。

**そ** のような植物を愛でることができた喜びなどを綴るのもさることながら、本稿で書きたかったのは歩いて



ていて見かけた注意看板についてである。先ず写真10のゴミの不法投棄についてであるが、ペットボトルや缶、菓子類の袋などの散乱が、さほど著しいものはなかったとはいえ、目についた。多くがつい捨ててしまったものであろうが、中には廃棄するためにそこまで持ってきたのであろうと思われるものもあった。ただ、ゴミが見られるのは山道の入口近くまでであった。

写真11は山火事防止のために重要であ





る。昨年、兵庫県で野外パーベキューの炭火の不適切な処理から大規模な火災が起こっているが、火には細心の注意を払ってもらいたいものである。かつて我が国の山火事の原因は大半がタバコの火の不始末であろうと云われていた。紙巻タバコの火の温度は枯草の発火点より高い。データにあたったわけではないが、山火事は筆者の幼少時に比べて減少しているように思われる。当時と今で違うのは禁煙思想の普及と喫煙者のマナー向上への啓蒙が行なわれていることである。しかしと言おうか、だからと言おうべきか、写真12のようなものも見かけた。タバコは煙の害が嫌われているが、火も大いに問題である。タバコは野山の発火装置である。絶対吸うなとまでは言わないまでも、管理は完璧にと言いたい（もともとこれは野山に限ったことではない。都心の某有名ホテルの火災は客の寝タバコが原因であった）。

写真13は大いに訴えたいことである。

を愛でる心があれば折らないで欲しい。これが世の常識であればと願う。野に花を摘むという風流、野趣もけっこうだが、それは限られた条件下でのみ許されることとしたものである。花泥棒に罪あり。盗掘は大罪。

そして写真14。植物の盗掘もご法度。動物の盗獲も然り。そこまでは、それに従えない人はいても、考え方としては容

種の絶滅は自然要因によるものもなくはないが、今日のそれは圧倒的に人為によるものである。絶滅が危惧される希少なものは何としても守らなければならないのだが、植物の場合、希少であるが故に盗掘されてしまうという現実もある。かつて礼文島で珍しくなかったとされるレブンアツモリソウは盗掘の対象となり、絶滅危惧種に指定されるほど激減した。筆者の自宅近くにカタクリの自生地があり、毎年開花を楽しみにしているが、年々株の数が減っているように思う。掘った跡ではないかと疑われる土の形状が見られたりもする。市が保護しており、それ自体はけっこうであるが、保護の施策が盗掘を招くことになっているように思えなくもない。保護のあり方が問われる。野生植物は野山の、「そこにあって」然るべきであり、その花を自宅の庭やプランターで咲かせようなどと思うべきでなく、ましてや商売目的の盗掘など言語道断。植物は見つけられたら逃

易に理解されよう。しかし「動物などを放つな」については世の皆さんの認識の程度はけっこう高くはないのではないかと。自分の家で飼うなり庭で育てるなりならいざ知らず、その土地に本来生息しない生物を野に放つようなことは、その土地の生物相の改変につながり生態系への侵略である。今日、外来生物の問題は由々しきものとなっている。本来そこにいる

げることができない。自分にとって珍しい植物を見つけた人は、眺めるなり写真を撮るなりに留めていただきたい。

新聞の読者欄の「カタクリの花」と題する一文に平泉・中尊寺参堂のお札所で働いているという方が以下のように書かれていた。「：カタクリは発芽してから花をつけるまで7〜8年もかかりますが：石段の傍らにも、今年は2株も芽を出し、それぞれ二つずつ花をつけ：。初老の女性が：なんと、手にカタクリの花を取って持っているではありませんか。：なんとということをするのだろうか腹立たしく、また悲しくなりました。」（『毎日新聞』二〇一五年四月二六日）そもそも自分の所有物であるならいざ知らず、そうでないものを勝手に採ることなど論外。「花泥棒に罪はなし」などと云われるが、なんのなんの、大ありである。他人様の所有物を我が物にしてはならないのは云うまでもなく、さらに野の花は自然に咲いていればこそなのであり、それ

筈のない生物がいること自体おおいに問題であるが、それに加え、それら外来種は在来種の生存を脅かすということも捨





状態ではあり得ないことであるが、人為による田沢湖の生息環境破壊で種として絶滅するところを救ったことになるの



14

で、それは多としたい。十和田湖にヒメマスを放流し、それによってかつて東北地方の飢饉の緩和に貢献した人の話（「十和田のヒメマス」）を小学校の教科書で読んだ時は美談だと思った。しかし、西湖のクニマスも十和田湖のヒメマスも国内由来の外来種（ヒメマスは種としてはベニザケと同種。後者の陸封型）である。両種とも生態系保全が今日ほど意識されていない時代に善意によって移入されたものである。南西諸島ではハブ対策として外来種たるマングースが放たれたが、所期の目的（ハブ退治）は果たされず、マングースによる在来動物（含む希少種）の捕食が問題となっている。その発案者が某大学の動物学教授だったと聞くと、開いた口がふさがらない。今日その害の大なるを見ると、善意よりも愚かさ、そして罪が感じられる。

外来種の問題、さらには生態系を保全することを人々が意識しなかった時代のことならいざ知らず、これだけ生態系が多く語られ、外来種が問題視されるようになった今日なお、自分の釣りの楽しみのために、さらには商売のために、ブラックバスを湖沼に放す、はたまた小さくて可愛かった時に飼い始めたアライグマを成長して獐猛になったら捨てる、というようなことは断じて許されない。外来生物を野に放つことは犯罪である。器物損壊は罪に問われる。外来生物を野生化させることは、生態系の損壊をもたらす。器物損壊も取り返しのつかない事態を招くかもしれないが、生態系の損壊はそれ以下のものではない。野生化した外来生物が及ぼす害は、多くの場合、一代では済まず、往々にして未来永劫である。このような多大な影響をもたらす、外来生物を野に放つという行為は重罪である。最後まで飼われないかもしれない外来種を商売にしている輩も放つておいてはいけない。世人の意識改革が望まれる。生物は本来の生息地においてこそである。

て置けない。日本の陸水系で北米より持ち込まれたブラックバス類やブルーギルにより在来魚などが捕食され、また北



11

大西洋の東岸では五〇年前にロシア海域に放流された太平洋産のタラバガニが分布を広げ在来生物に危機をもたらしていると言ふ。前者はスポーツフィッシングのために、後者は漁業目的で、何れも意図的に放流された結果である。

**自** 然を破壊して人類の文明が成り立つてきた以上、今更とは思わが、それでも今日まで保たれてきた生態系は維持したいものである。数年前、絶滅していた筈のクニマスが生きていることがわかり、明るいニュースとなった。本来の生息域の田沢湖で前期前半に人による自然破壊の犠牲となって絶滅し、地球上から姿を消した



12

と思われていたものが、富士五湖の一つ、西湖で生き延びていた。田沢湖から西湖に移されていたものであり、自然の



13



## 子どもの銅像

高山陽子

A BRONZE STATUE STORY



1.長崎原爆資料館前

子どもの銅像はどこか不憫である（写真1）。広島平和記念公園の《原爆の子の像》は、佐々木禎子をモデルにしている（写真2）。禎子は一九四三年、広島に生まれ、二歳で被爆した。十年後、白血病にかかり、八カ月で亡くなった。死後、禎子の小学校の同級生らが「団結の会」を作り、禎子の碑を作ろうと計画した。そのころ、原爆で亡くなったすべて

の子どもたちを慰めるための「広島平和をきづく児童・生徒の会」が結成された。この二つの会が中心となって像を建立するための募金活動を行った。そして、一九五八年、折り鶴を高くかかげた少女の姿として、高さ九メートルの《原爆の子の像》が完成した。

この像は、《千羽鶴の像》とも呼ばれる。禎子は病室で病気が治るようと

願って鶴を折り続けた。禎子と折り鶴は平和を願う象徴となり、世界各地から送られた折り鶴が像の周囲に展示されている。

東京都横網町公園にある《震災遭難児童弔魂像》（写真3）は、関東大震災で亡くなった約五千人の児童を追悼するために建立された。この像の建立を進めたのは東京市教育局であり、一九二八年に



2.禎子の像



3.児童弔魂像



開かれた東京市校長会の賛同を得て、彫刻家の小倉右一郎（一八八〇～一九六二）に制作が依頼された。費用は全市からの寄付金によって賄われ、一九二九年、《東京市震災横死児童記念物》が除幕された。戦時の金属回収令により撤去されたが、一九六一年、小倉右一郎の弟子の津上昌平と山畑阿利一によって再建された。

この銅像は完成当時から《悲しみの群像》や《横死記念像》と呼ばれ、論議を引き起こした。例えば、一九二九年六月二三日の『東京朝日新聞』には、「悲しみの群像に非難の投書殺到 委員会も無理ならずと認め、近く改作の協議か」という記事が掲載された。その他の各紙も《横死記念像》の写実性を非難している。像は、一二人の等身大の少年少女が地震による炎からかばい合っている姿を描いている。この様子が、震災の恐怖や子どもたちの悲惨さをまざまざと想起させた。子どもを亡くした親にとっては、



4. 被爆50周年記念事業碑

残酷な現実よりも、あの世で子どもたちが幸せに暮らしている様子を表現してほしいという願望もあった。

子どもを亡くした悲しみをどのように表現するかという問題は、近年でも起こっている。長崎の被爆五〇周年記念事業碑として作られた母子像（写真4）は、訴訟にまで発展したケースである。この母子像は、長崎市の地元有識者による「平和公園再整備検討委員会」によって、原爆落下中心碑に代わる記念碑として計画された。結局、市民らの反対で、中心碑に代わることはなく、公園内の別

に作られた。ピエタは、イタリア語で「哀れみ」の意味がある。ピエタという聖母子像は昔からあったものの、この形が戦死者を追悼するために広く使われるようになったのは、第一次世界大戦後である。多くの戦死者を出した第一次世界大戦後、たくさん

碑や銅像が作られた。夫や息子を亡くした女性たちの悲しみを慰めるためには、それまでに多く作られてきた騎馬像や軍人の立像では不十分であった。そこで、子どもを亡くした母親の代表としてピエタが作られた。《横死記念像》の制作者の小倉右一郎も、写実性に関して批判さ



5. 平和公園の母子像

の場所に置かれた。市民らは、ピエタを想起させる母子像が、政教分離に違反するとして、市にこの像の撤去と伊藤一長市長に制作費一億四七〇〇万円を返還するように求めた。二〇〇四年十月二二日、最高裁は市民の上告を棄却した。論議が続く中、二〇〇七年四月一七日、伊藤前市長は、四選を目指して遊説を行っていたところ、暴力団幹部の男に銃撃された。翌日、前市長は死亡し、母子像論争も決着しないまま下火になった。

長崎の母子像が問題になったもう一つの理由は、女性の服装にあった。戦火の中、バラの花が散りばめられたスカートをヒラヒラとなびかせている様子は、子どもを抱く母親の姿として相応しくないと批判されたのだ。

ピエタ像とは、十字架から降ろされたキリストを抱くマリア像を指す。バチカンにあるサン・ピエトロ大聖堂のピエタが有名なものの一つである。このピエタは、ミケランジェロによって一五世紀末



6. 嵐の中の母子

れた際に、死者の冥福を祈るための彫像であれば子どもを抱くマリアを制作したが、震災を思い起こさせるものを作ってほしいと依頼されたので、あのような姿にしたと反論した。

ピエタ像は広島平和記念公園と長崎平和公園で見られる。写真5は、一九八五年にソ連から長崎に寄贈された母子像であり、写真6は、広島



ある。

悲しみを表す子どもの銅像は、設置に  
関して世間の賛同を得やすい。子どもた  
ちを追悼あるいは記念するための銅像を  
建立する活動は、他の政治家の銅像を建  
立する場合と異なり、比較的容易である  
分、その形態や詳細に関しては物議を醸  
すことも少なくない。童謡「赤い靴」の  
少女のモデルとなったという岩崎きみを  
巡る一連の騒動もその一つである。

「赤い靴」は「いてた〜おんな〜の子  
〜」で始まる「赤い靴」は、一九二一  
（大正十）年、詩人の野口雨情  
（一八八二〜一九四五）が作詞し、翌  
年、本居長世作が曲をつけた。この歌の  
モデルは麻布の孤児院で一九一一年に結  
核のため亡くなった岩崎きみであるとい  
われる。

きみの母の岩崎かよは未婚の母であっ  
た。かよは、一九〇二（明治三五）年、  
静岡県清水市（現、静岡市）できみを産  
むと、一九〇五（明治三八）年、きみと



7.山下公園

留寿都村の《母思像》（一九九一年）、  
小樽市の《赤い靴 親子の像》  
（二〇〇七年）（写真10）、函館市の  
《きみちゃん像》（二〇〇九年）、青森  
県鯉ヶ沢町《赤い靴の像》（二〇一〇  
年）である。

麻布十番にある一・三メートルの像の  
台座には、「母と子の愛の絆を、この  
『きみちゃん像』に託して、今、みなさ  
まの幸せを願ってやみません」と記され  
ている。一九八九年、商店街がきみの銅  
像を建てると、足元に一八円が置かれ  
た。それがきっかけとなり、商店街はき  
みの足元に募金箱を設置し、募金はユニ  
セフに寄付されている。そして、夏に商

共に函館へ渡り、留寿都村の平民農場へ  
入植した。平民農場は、キリスト教を基  
盤とする社会主義思想結社である平民社  
が経営した農場であった。幸徳秋水ら  
は、日露戦争開戦直前の一九〇三（明治  
三六）年、『平民新聞』を創刊し、「平  
民主義」「社会主義」「平和主義」を唱  
えた。官憲の取り締まりが厳しくなる  
と、一九〇四年、平民社は開拓地の北海  
道にユートピアを求め、真狩村ノボリエ  
ンコロ地区（現、留寿都村）に入植拠点  
を築いた。この時、きみの義父（養子縁  
組）である佐野安吉らが最初に入植した  
と言われている。一八九七（明治三十）  
年、開墾あるいは植樹に成功した場合は  
無償で土地を付与するという「北海道国  
有未開地処分法」が施行され、北海道に  
大農場建設ラッシュが起こった。

かよは、一九〇五年に平民農場に入植  
した平民社の鈴木志郎と結婚し、農場で  
働くことになった。農場での暮らしは厳  
しく、鈴木夫妻は、かよを函館のアメリカ

店街で開催される納涼祭の際にも多く  
のお金が集まるといふ。

鈴木志郎の出身地である鯉ヶ沢や、き  
みとかよが別れた場所である函館でも銅  
像設置のための募金活動が始まり、それ  
ぞれ小さなきみの銅像が建てられた。

このように各地できみの銅像が建てら  
れているものの、童謡「赤い靴」のモデ  
ルが岩崎きみであったという定説につい



8.日本平

カ人宣教師のヒュエット夫妻に預けた。  
ヒュエット夫妻が帰国する際、結核に冒  
されていたきみは、麻布にある鳥居坂教  
会の孤児院に預けられた。そして、きみ  
は九歳の生涯を終えた。

五年で開墾を終え、審査に合格すれば  
約一〜ヘクタールの開墾地が無償で付与  
されることになっていたが、農業経験者  
が少なく、土地の条件も悪かったことか  
ら、平民農場は三年足らずで解散した。  
その後、鈴木志郎は札幌の北鳴新報に就  
職し、そこで、野口雨情と石川啄木と出  
会った。三人は小樽日報社に移った。野  
口雨情はかよの娘のきみの話を鈴木志郎  
から聞き、童謡「赤い靴」を作詞したと  
いう。

「赤い靴の少女」の銅像は、現在、七  
体ある。山下公園の《赤い靴をはいてい  
た女の子の像》（一九七九年）（写真  
7）、日本平の《母子像》（一九六八  
年）（写真8）、麻布十番の《きみ  
ちゃん像》（一九八九年）（写真9）、



9.麻布十番

ては疑問の声が出ている。岩崎きみは実  
在したが、「赤い靴をはいていた女の  
子」のモデルであったか否かははっきり  
していない。岩崎きみが「赤い靴」のモ  
デルであるとしたのは、一九七八年に北  
海道テレビが制作したドキュメンタリー  
番組であった。この番組は全国でも放送  
され、北海道テレビの記者であった菊池  
寛氏が著した『赤い靴はいてた女の子』  
は赤い靴児童文化大賞特別賞を受賞し  
た。

この番組の問題点とされるのは、ヒュ  
エット夫妻が函館に滞在した時期と、夫  
妻がきみを預かった時期が一致しないこ  
とである。かよがきみを夫妻に預けたの



私の左にスリランカ人留学生、さらに隣にネパール人留学生。

ゼミナール  
紹介Seminar  
introduction

## 前川ゼミ

## 「ご自由にどうぞ」

## 前川輝光

## 【では、どうしてゼミ運営をするのか】

【前川ゼミの特殊事情】  
国際関係学部の中で、私は早い時期から「宗教」と「インド」の二つの看板を背負ってきた。私のゼミを希望する学生は、基本的にこの二つの看板のどちらかに引かれてやってくる。看板が一つだけのゼミとは、私のゼミのありようはどうしても多少違ってこざるをえない。思い切って、どちらか片方だけの看板でやってみようかと思うこともあったのだが、結局、そうしなかった。

前川ゼミでは、まず三年生の途中まで、こちらで決めた共通テキストを輪読する。このテキストには、インドにも宗教にも関わるテーマを選ばなければならぬ。これがなかなか大変で、悪戦苦闘した。ちなみに今年度のテーマは「宗教と食文化―ヨーロッパ・日本・インド」である。



10.小樽市 運河公園

は、一九〇五（明治三八）年であるが、ヒュエット夫妻が函館に赴任したのは一九〇六（明治三九）であり、一九〇八（明治四一）年に帰国した。この問題は決着がつかないまま現在に至る。  
一般的に銅像は高い台座の上に置かれているため、記念撮影をすることはできても直接、触ることはできない。台座の高さは、その銅像の人物が、容易に触ることができないほど立派であることを暗示しているのである。これに対して、子どもの銅像はもっぱら低い台座に置かれている。その高さはお地藏さんくらいである。

山下公園の「赤い靴の少女」の膝は、テカテカしている。訪れる人々、特に年配の女性たちが「かわいそうに」と言って膝をなでるためである。触ることができない高さに銅像があることも、子どもの銅像の特徴の一つであり、目線よりも下にあることが子どもの不憫さを一層、際立たせるのである。



【自由研究】

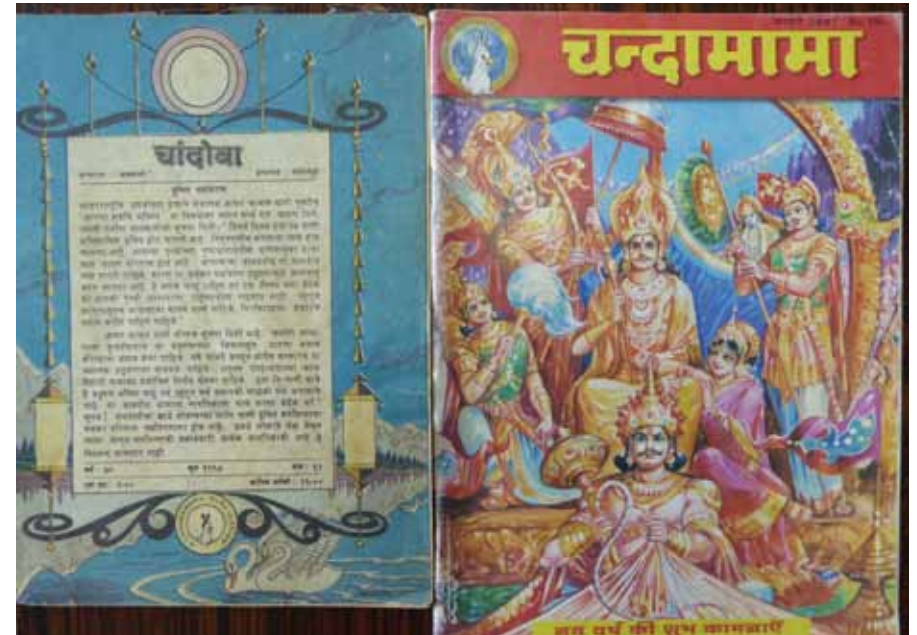
学生には毎年、こう言うことになっている。「私の得意分野は宗教とインドだけど、特にそれにこだわらなくてもいい。国際関係学部の授業で取り扱っ

振り返ってみると、これまでインドの叙事詩や聖書、仏典など、学生が自分からはなかなか手にしないような本をゼミで読んできたが、ゼミ生のレポートを読むと、毎年、なかなか面白いことが書いてある。宗教にしろ、インドにしろ、学生各自が自分に引き寄せて理解し、関心を持てるように工夫したつもりだが、それなりの成果はあったようだ。

共通テキストについてのレポートを書き、それについての最終討議も済ませると、ゼミ生は各自、自分の研究テーマを選ぶことになる。テーマはどのような範囲から選ぶのかというと、私の方針は「ご自由にどうぞ」である。



『チャンダーマーマー』の大人気シリーズ「幽鬼噺」。毎回、このシーンから始まる。右端にちょっとだけ見えている絵を左の絵とくらべてみてください。



インドの12言語で出版されている子供向け絵物語月刊誌『チャンダーマーマー』。神話に材をとった話が多い。ここにはヒンディー語版とマラーティー語版を紹介。



「日本の食糧事情とその地球環境への負荷」「エスニック・エリート」などである。

それでもやはり、もともと「宗教学の前川」「インド研究の前川」を見て集まったゼミ生が多かったため、宗教かインドをテーマに選ぶ学生が半ばを

超えていた。年度によっても差があり、大半の学生がインドおよび南アジア関連のテーマと取り組むこともあったし、ほとんど宗教学のゼミと言ってもいい年度もあった。

「『自由はどうぞ』というゼミ運営をしても、全般的に不思議にゼミのまとまりはあった。考えてみれば、わが国際関係学部自体が、もともと複合学部である。多方面に関心を持つ学生が多いのかもしれない。聞くところによると、学部内には前川ゼミ以外にも「何でもゼミ」的傾向の濃厚なゼミがあるようである。

### 【ゼミ生活あれこれ】

私には人の顔を見ると何かしら冗談を言いたくなる悪癖がある。他のゼミの学生に言われたことがあるが、前川ゼミはよく笑うゼミであるらしい。

もちろん笑ってばかりいたわけではない。伝統的に前川ゼミ生は、出足に

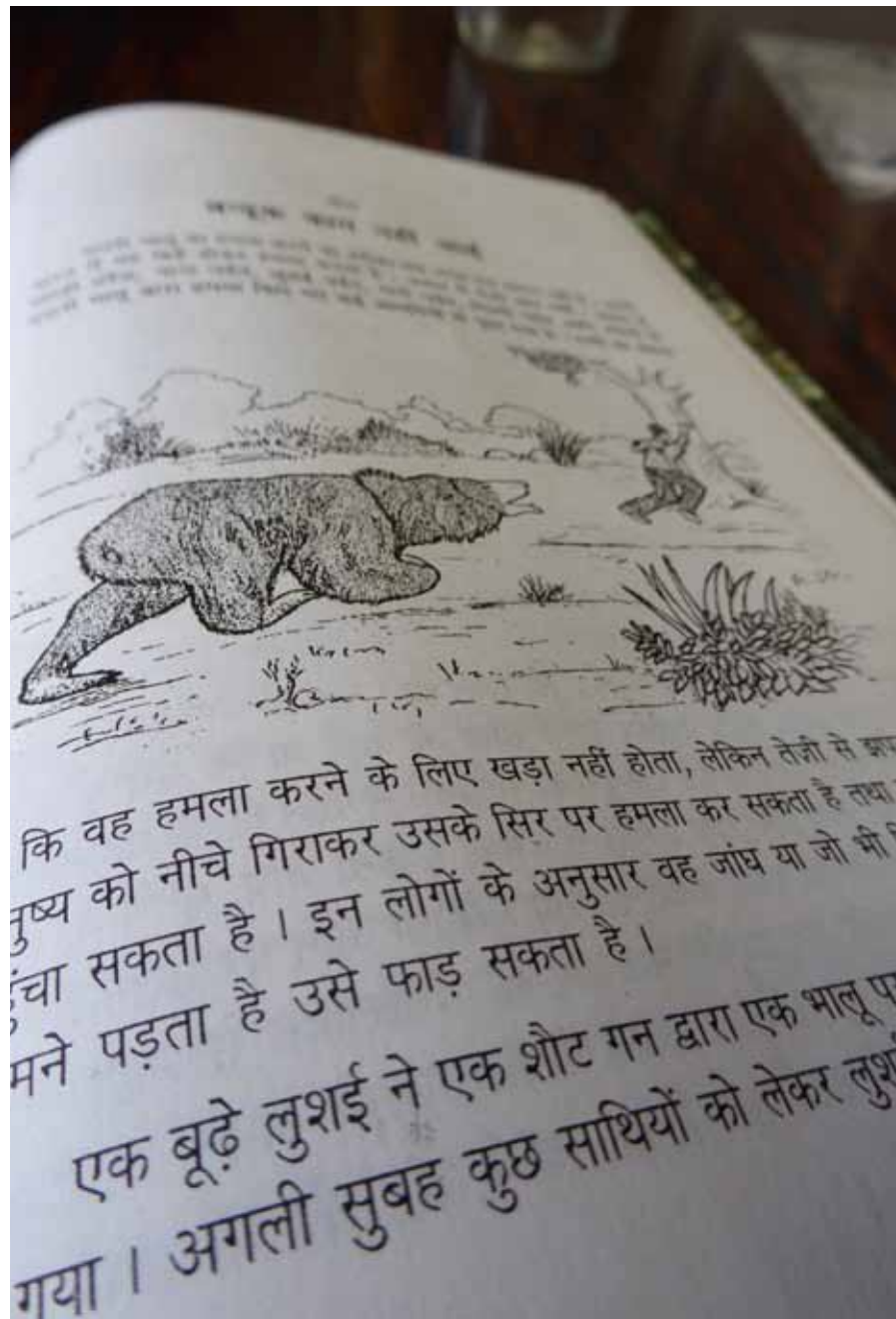
ているような内容なら、なんだっていいよ。ただし、注意しておいてほしい。宗教、インドに関するものは当然、私に専門知識を期待していいけど、他の分野については、それは無理だ。でも実は、必ずしも専門知識がないと卒論指導はできないとも私は思っていない」。

無責任な安請け合いのようだが、論文の構成や論理の妥当性などに注目することで、けっこう専門外の分野の卒論指導もこなしてきた。不思議なことに前川ゼミから学部優秀論文に選ばれた卒論にはこういうタイプが多かった。「原子力発電の理想と問題点」

「日本の食糧事情とその地球環境への負荷」「エスニック・エリート」などである。

それでもやはり、もともと「宗教学の前川」「インド研究の前川」を見て

集まったゼミ生が多かったため、宗教かインドをテーマに選ぶ学生が半ばを



ヒンディー語で書かれた子供向け動物物語の本の挿絵。

やや難があるが、勝負どころでは頑張った。毎年の卒論追い込み時期がそうだった。特に卒論指導最終日には、数人のゼミ生が資料やコンピュータを持って私の研究室に詰め、日付が変わり、午前二時半というようなことも二〜三回あった。ゼミ生たちにとっても、忘れられない一コマとなったようだ。

ところで、ゼミ飲み会の二次会は、ここ数年、武蔵境駅北口そばのインド料理店アダルサに行つて、インドとネパールのビールを飲むことにしている。

## Seminar introduction



## 2015年

## 夏季 フィリピン

## フィールドワーク 小張 順弘

## 1. 「多文化フィールドスタディ」概要

二〇一四年度から履修科目として三、四年生対象の「多文化フィールドスタディ」が開始された。それ以前には、「ゼミ夏季研修」としてゼミ別に実施されていた海外演習であったが、二〇一四年度からは四年間のカリキュラム内で中国、韓国、ベトナム、フィリピンの四カ国を対象とする現地演習科目が整備され、二〇一四年度は二七名、二〇一五年度は三四名の学生たちが参加した。

担当教員により訪問地や実施・運営方法は異なるものの、学生が「自ら課題を選定する力」「自文化と異文化の差異を見極める力」「現地社会を理解する力」「問題に果敢に挑戦する力」「失敗を克服する力」「資料を分析する力」「発表できる力」を育むことを共通課題とし、通年科目(前期に事前指導・準備、夏季休暇中に現地滞在、後期に事後指導・総括)として実施されている。また、海外滞在中の緊急事態への対応方法(体制確

立、マニュアル作成)や参加学生への保険説明会なども実施され、大学の危機管理体制も整備された。

## 2. 二〇一五年度「多文化フィールドスタディ(フィリピン)」

前期は事前準備としてフィリピンについての一般的な学習と調査方法の確認、訪問先大学の学生と動画を通じた事前交流(自己紹介、テーマについての紹介)を行った。さらに、「フィリピン社会の実態」「同世代の現地大学生との交流」「日本とフィリピンの関係性」の三点を中心とする現地プログラム実施について、現地関連機関・担当者らと事前連絡・調整に当たった。参加にあたり「フィリピンにおける社会開発と変化」という共通テーマのほか、各自の興味や関心にもとづく個人テーマも設定した。以下、二〇一五年度に実施された現地での内容について、学生たちの事後感想も交えながら紹介する。

## 3. セブ滞在(九月三日〜九月四日)

## ● 初日 出国(九月三日)

羽田空港に集合後、フィリピンのマニラに向けて出国し、マニラで国内線に乗り継いでセブへと向かった。マニラ到着後、搭乗手続きのために国内線カウンターに行くと、予定していたフライトがキャンセルされていた。幸いにもその日の最終便に空席があり、急遽搭乗手配をしてもらったことができた。初日から「何が起るかわからないフィリピン」を経験することになったが、「今後セブではどのようなことが起きるのか楽しみ」という心強い学生もいた(写真1)。

## ● 二日目 エコ・パーク、市場、TOPS 視察(九月四日)

「南の島」を連想させる観光地として知られているセブにはリゾートホテルが建ち並び、ダイビングや島巡りなどのアトラクションも備わっている。また、外資系企業が多く進出している輸出加工区、近隣の島々や国外との物



流拠点である国際港、首都マニラに次ぐ第二の都市、北部ミンダナオ島やビサヤ諸島を含む中南部フィリピンの中核都市としての役割も担っている。高級リゾートが多い中、私たちはエコ・ツーリズムを掲げるセブ市近郊のリロアン町にあるエコ・パークを訪問し、自然環境を利用したリゾート施設の取り組みを見学した(写真2)。

午後には隣のコンポステラ町の市場を訪問し、フィリピン地方部の日常生活を



● 四日目 マクタン島、  
 ビーチリゾート視察(九月六日)

外庄への抵抗やフィリピン独立の象徴とされるラプラプ王像(スペインへ抵抗したマクタン島の部族長)やスペイン文化(キリスト教文化)を記念するマゼラン記念碑がある、マクタン島のマクタンシュライン(ラプラプ像とマゼラン記念碑)を訪問した。視点によっては矛盾する歴史(「独立」と「受容」の記念碑)



6



4



3



7

が同時に存在し、大航海時代にフィリピンを発見したといわれるマゼラン来訪から始まった歴史の複雑さを知る機会となった(写真7)。その後、マクタン島ビーチリゾートで昼食をとり、施設を見学した。豪華なブッフエステイルの昼食であり、充実した宿泊・滞在施設は多くの外国人観光客で賑わっていた(写真8)。



8

覗いた(写真3)。その後、セブ市を一望できる展望台TOPSを訪問した(写真4)。

● 三日目 縫製工場、  
 現地ビーチ視察(九月五日)

セブ市郊外ミングラニリア町にある日系ウエディングドレス縫製工場を訪問し、生地からドレスができるまでの一連の工程について説明を受けた。ここでは、現地従業員の労働・生活環境についての話を聞く機会も得た。ファッションへの興味を持つ学生は、低賃金で働く熟練の労働者たちを目にして、ファストファッションの洋服がアジアで生産されていることは知っていたが、ウエディングドレスまでもが海外工場で日本向けに生産されていることや、現地労働者には想像もつかない値段で日本で取り引きされている現状に驚いていた(写真5)。

工場見学後、地元で暮らすフィリピン人が休日を通りすビーチを見学した。銷



5

びついて音の出ないカラオケ機器、屋根が傾いているコテージ、砂浜で遊ぶ小さな子供たちを目にして、フィリピンの観光客用ビーチを訪れたことがある学生はその違いを口にしていった(写真6)。





12

関する質疑応答が続いた。その後、グループごとにフィールドワークについて発表を行い、プログラムの総括とした(写真12)。  
お別れ夕食会では、互いに別れを惜しむ様子であった。通常の授業期間中であるにも関わらず、日本からの学生を積極的に受け入れてくれた現地大学生に感謝したい。今後の若者世代の交流拡大の一つの機会となつてほしいと願っている。



9

●五〜九日目 サンカルロス大学  
プログラム参加(九月七日〜二日)  
セブ市内にあるサンカルロス大学の協力を得て、講義とフィールドワークを含むプログラムに参加した(写真9)。講義は、「セブについてのオリエンテーション」「フィリピンの歴史・文化・社会」「日比政治関係…アジア太平洋地域における積極的役割」「セブアノ語」を



13

●一〇〜二日目 NGOホームステイ  
(九月二日〜三日)  
マニラに本部があるNGO団体セブ支部を訪問し、その活動内容について説明を受けた。市内数カ所で児童教育・給食、教員育成、自立支援などを主な活動を見学したあと、NGOメンバー宅でのホームステイを実施した。学生たちにとって、フィリピン滞在中で最も心に残る体験の一つになったようだ(写真13)。  
「高床式住居のような水上にある粗末なつくりの家」「狭い家」「貧しい家」「電気のない家」に滞在し、「必要最低限の生活」



10

受講した。また、大学の「国際関係」の授業にも参加し、フィリピン人学生たちが学ぶ様子を見学した。学生間で日比関係についての活発な意見交換が行われた(写真10)。



14

であったと参加学生は振り返っている。家の中にはパソコン、テレビ、カラオケ、携帯電話などがあり、家の「外観」と「内観」とのギャップに驚いていた。  
ホストファミリーや近所の人々は暖かく迎えてくれ、多くの子供たちとたくさん遊び、家族・親族、近所づきあいのつながりを感じる体験となったようである。七人兄弟の家に滞在した学生は、「隣で寝ている六歳の娘さんに腕をつかましながら寝た」ことが印象的であったようだ(写真14、15)。



11

講義終了後には、現地大学生がバディー(案内役)となり、合同フィールドワークを四日間実施した(写真11)。  
最終日には「日本・フィリピンの若者文化の紹介」「フィールドワークの結果」について発表会を実施した。両国の若者文化についての発表では、互いの文化に

●二六日目 教育省、博物館訪問  
(九月二八日)

フィリピン教育省を訪問し、JICAが支援する教育制度改革プロジェクトについて説明を受け、フィリピン教育分野の現状と課題を理解する機会となった。大学入学までの初等・中等一〇年制から一二年制への移行と、幼稚園から高等教



18



19

育進学までの一貫カリキュラムに変更し、二〇一六年度の実施に向けた改革準備の途中であると説明を受けた(写真19)。  
午後には、マカティ市の博物館を訪問し、フィリピンの歴史や社会につい



20

て、ジオラマ等の展示などを通じて理解を深めた。スペイン、アメリカ、日本による植民地時代を経験してきた複雑なフィリピンの姿を再確認する機会となった(写真20)。

●二日目 マンゴー工場視察、  
マニラへ移動(九月二四日)

フィリピンの代表的なお土産であるドライマンゴーの生産・加工工場を訪問し、数千人の従業員が働く規模の地場産業の現状を視察した(写真16)。工場見学後、一二日間滞在したセブを離れてマニラへと向かった。



15

4. マニラ滞在(九月二四日～二〇日)

九月一四日～二〇日にはマニラの英語学校で体験授業を受けた。その後、博物館、教育省、NGO、巨大ショッピングモール等を訪問し、フィリピンの首都マニラの多面性に触れた。

●三～五日目 英語研修(九月二五日～二七日)、NGO訪問(二七日)



16



17

三日間、九時～一七時までオルティガス市にある英語学校でのマンツーマン英語研修に参加した。現在、「フィリピン留学」として知られる英語学習の現状を体験した(写真17)。

一七日には、フィリピン残留日系人を支援するNGOを訪問し、日系人問題の現状について説明を受けた。戦争により家族と引き裂かれ不遇の人生を送ってきた日系人の存在を知り、戦争が人々に与えた影響や日比関係の一面を知る機会となった(写真18)。



5. おわりに  
 学生たちの感想には「沢山の刺激を得た」「忘れかけていた在学中の目標に再



挑戦したいと思った」「私自身の将来を考える上で大きなものとなった」「もつと学ぶことがあると思った」「観光とは違うフィリピンを知れて充実した日々を過ごせた」「五感を使って多くを学ぶことができた」など様々なものがあつた。また、これまでフィリピンを何度も訪問したことのある学生も「何かを学びにという感覚での訪問はとても新鮮」であり、「二週間は短いが、内容がとても濃かった」とのことだった。  
 慣れない場所で現地の人々と過ごし、体調管理から危機管理まで気を使い、異なる体験を毎日繰り返すことは、若い学生であつてもかなりの負担であつたに違いない。事実、体調不良を訴え、医師の診断を受けた学生もいた。無事に滞在を終えたことは幸いではあるが、引率教員の立場からは「幕の内弁当」のように詰め込みすぎたのかもしれないという反省が残る。しかし、栄養バランスに関してではできる限り配慮した(つもりである)。

●一七日目 (九月一九日)  
 最終日には、アジア有数の巨大消費空間であるショッピングモールを訪問した。一日ではまわりきれないほどの規模を持ち、消費文化や娯楽文化の中心的役割を担っているモールは、今までのセブ滞在から得た学生たちのフィリピンに対するイメージとは異なるものだった。「お洒落な消費者」「商品が溢れている現状」「物価の高さ」を口々にし、街中に多数存在するモールを目にして、「こんなに必要なのか」と疑問すら持ったようだ。このようにフィリピン社会の格差(地域格差、経済格差など)をあらためて感じる一日となった(写真21)。  
 ●一八日目 帰国(九月二〇日)  
 搭乗手続きの際に重量超過を指摘され、チェックインカウンター前で必死に荷物を入れ替える学生たちの努力もあり、無事に帰国便への搭乗手続きを終了した。一八日間のフィリピン滞在



を終え、重い荷物とそれぞれの想いを持ち帰り、無事に帰国した(写真22、23)。  
 この種のプログラムは、大学在学中の各種資格試験や能力試験とは性格が異なるために成果を可視化することは難しい。単なる体験のみとして終わる可能性すらある。しかし、異文化に触れ、自らの立ち位置を見出そうとすることで、学生たちは今までは異って見える周囲の景色に気づくであろう。「進路を考える上での貴重な経験であつた」という学生もいたが、その真価は一人一人がこれらの体験を今後どのように消化していくかにある。  
 国際関係学部多文化コミュニケーション学科の学生は、異なる文化や人々への関心を強く持つ若者が多い。今回の限られた条件の中で滞在や(ある程度)用意された体験での気づきが、学生たちの「今後の歩み」の中で様々な形で連鎖反応を引き起こしていくことを楽しみとしたい。



# 3年ゼミ

## タイ、プーケット島でのゼミ合宿

大塚直樹 + ゼミ生有志

一角で、簡単なミーティングを実施し、



初日は移動日で、成田空港に集合後、大韓航空で韓国のインチョン空港まで行き、そこで航空機を乗り換えて、深夜にプーケット空港に到着した。到着後は、専用車で宿泊先のホテルまで行き、チェックインをした後に解散し、翌日に



その日のスケジュールを確認した。この日は、二グループに分かれて、内勤業務とガイドのアシスタント業務をおこなった。内勤では、自己紹介の後、エージェンツランゲージを使用したホテル予約など具体的な仕事を体験した。同時に現地ホテルのスタッフからのホテル紹介などをしてもらった。ガイドのアシスタントでは、現地ガイドと一緒に空港や観光スポットを回り、実際のガイド業務のポイントなどを学んだ。三日目は前日のグループを入れ替えてそれぞれの業務を体験した。



四日目はホテルインスペクションを実施した。ランドオペレーターがホテル情報を収集する際に使うシートを利用して、ホテルのアメニティを確認しつつ、三つ星から五つ星のホテルの視察を行った。同時に、ホテルで働く日本人のゲストリレーションの方から自らの経歴を語ってもらった。

同日午後にはパトンビーチのジャックセイロン・デパートで開催されたジャパポップカルチャーフェスティバルに出店していたプーケット日本人会のブースの手伝いをした。フェスティバルには、日本に興味をもっているタイ人が多く集まり、日本食の話題などでコミュニケーションをとることができた。同時に、プーケット在住の日本の方がたの話も聞くことができた。また、パントンタウンを訪れていた外国人観光客（われわれも外国人であるが…）へのインタビュー調査を実施した。



国際関係学部の一部のゼミナールでは、ゼミ内外の活動として合宿などの課外活動を積極的にこなっている。多文化コミュニケーション学科の大塚ゼミでは、三年次に希望者参加型で海外ゼミ合宿を実施している（希望者のみで実施のため、ゼミ外活動として位置づけている）。ゼミ合宿の行き先は、例年プーケット島（タイ）である。ゼミ合宿は

2015年度ゼミ合宿の日程		
日付	曜日	スケジュール
9月10日	木	移動日 KE704 NRT-ICN KE637 ICN-HKT 着後、専用車でホテルへ
9月11日	金	グループごとに日系旅行会社での内勤業務と観光ガイドアシスタント業務
9月12日	土	11日のグループを入れ替え
9月13日	日	ホテルインスペクション/ジャパンフェスティバルでの手伝い/観光客へのインタビュー
9月14日	月	日本語学ふ現地高校生との交流
9月15日	火	修了式 夕食後、市内から空港へ
9月16日	水	移動日 KE638 HKT-ICN KE703 ICN-NRT

「観光現場におけるランドオペレーター体験と文化交流」をテーマに実施している。なお、ランドオペレーターとは、主に海外旅行において、ホテルや観光地、現地の交通手段など、往復航空機以外の地上手配を専門におこなう会社のことを指す。

二〇一五年のゼミ合宿は、九月一〇日（木）～一六日（水）まで五泊七日で実施した。参加ゼミ生は、合計一〇名であった。日程を以下に示す。





第三に、アジアの英語を学んでほしい点があげられる。多文化コミュニケーション学科では、必修ではないものの、二年次前期に五ヶ月間のアメリカへの語学留学（AUA P）に参加することができる。また、学部としてもTOEIC等を積極的に受験させ、英語能力の向上に努めている。しかし、将来的な英語の運用場面を想定してみると、今後ますます、非ネイティブ同士での会話の機会が増えてくる。したがって、学生のうちに「さまざまな英語」（＝複数形の英語）に触れる機会をもつことは肝要である。タイの人びとと英語でコミュニケーション



ンをとる経験は、単数形の英語を複数形の英語に読み替える機会に他ならない。第四に、現場レベルでの文化交流の大切さを学んでほしいことがあげられる。SNS等が急速に普及するなかで、例えば、地球の裏側に住む人びとと容易にコソタクトがとれ、まさに時間と空間の障壁が取り払われつつある。より多くの人がつながるようになってきた現代社会だからこそ、実際に現場へ行き、現地の人びとと



五日目は昼からブーケットで日本語を学ぶ高校生（サトリブーケット校）との交流会をおこなった。高校の学食で食事



をした後、授業中に教室にお邪魔して、ゼミ生が日本語を教える手伝いをし、さらに交流会を開催した。交流会では相互に出し物を披露した。引率教員としては、以下の四点を学び、かつ体験してほしいと考え、毎年この合宿を企画している。第一に、観光の現場を具体的に学ぶことがあげられる。ゼミ生の一部は将来的な就職先として観光産業に関心をもっている。日本の日常にいるとみえにくいランドオペレーター業務を体験することで、ツアーがつくられる過程を少しでも知り、日本（や海外）の旅行会社で働く際に役立ててほし



いと考えている。第二に、海外で働く日本人の声を聞き、概念的なグローバル化ではなく、現実社会でグローバルに活躍する人びとの体験を感じてほしい点があげられる。もちろん、海外で働く動機やきっかけは人それぞれであり、一般化することができない。しかし、異国の現場に身を置いたゼミ生たちが、海外で働く日本人から直接話を聞くことにより、何か将来の糧を得られればよいと考えている。

時間・空間を共有しつつ、相互交流を図ってほしいと考えている。こうした相互交渉は、他者の差異を容認し、それを受け入れられないままでも理解することの大切さを肌感覚で知ることにつながり、まさに本学科が掲げる多文化体験にも通底する。もう少し進める（つまり、欲を出す）と、よりローカルな社会を体験してほしいとも考えている。したがって、夕食の際には、希望者のみではあるが、夜になるとブーケットタウンの市場周辺に出現する屋台で食事をとるようにしている。現地の人びとが往来する雑踏に混じり、（さらに突如のスコールにも見舞われる）その場に身を置いて食事をするので、少しでも地元の雰囲気味わってほしいと考えている。最後に、（教員側の「願い」が現実的に届いていたのか）参加した学生の声を紹介して、本文を閉じたい。



今回、ランドオペレーター業務、具体的にはホテルの手配や空港までの送迎、また現地でのガイドの仕方などの業務を通して、さまざまなことを学んだ。まずホテルの予約手配では、エージェントランゲージを全て覚えていないと業務を円滑に進めることができず、当然ではあるが、契約

### 業務の多様性を知る

が発生することから、責任感を持って仕事を行うことが大切であると学んだ。また、現地でのガイドは、その日の天候や気温に気をつけつつ、お客様に最適な観光スポットを提案すると同時に、お客様の体調などにも気を配る必要があり、知識はもちろんのこと、より広い観点からガイドをすることが大切であると学んだ。私が考える海外で働く上で最も大切なことは、自分が異国の地にいることを理解し、当たり前を当たり前だと思わないことだと思った。  
(上信優香里)

voice of the student



ブーケットでランドオペレーターの内勤業務の仕事の一つであるホテルの予約を体験した。過去のお客様の依頼を元に実際にあるホテルへ予約のメールを作成した。メールはエージェントランゲージを用いて作成し、様々なお客様の

### 責任の大きさと楽しさを体験

要望に合わせて情報を入力する。これを三人一組で取り組んだ。しかし、三人一緒にいてもかなり不安があり、模擬予約ということでは分かっていても緊張した。なぜなら、この情報を打ち間違えれば、楽しみにしていたお客様の旅行を台無しにしかねないからである。この業務では、強いプレッシャーを感じ、仕事の大変さを実際に体験できた。また、同時にやりがいのある仕事だとも思った。初めて仕事というものを経験し、責任の大きさと楽しさの両方を学ぶことができた。  
(西村麻衣)



ホテルの手配や現地での交通手段の確保、観光地の確認など、旅行者が

### キーワードは連携

海外旅行をする際に必要なことを全てまかなっているのが、ランドオペレーターは海外旅行者にとつていなくてはならない存在であることがわかった。海外旅行は、日本の旅行会社と現地オペレーターとの連携で成り立っているため、お互いに失敗は許されず、良い信頼関係を築くことが大切であることが業務から理解できた。またガイド業務では、知識だけでなくさまざまな気配りが必要なことを実感できた。  
(大瀬愛)

voice of the student



今回、実際にホテルへ予約するという仕事を体験してもらいとても貴重な経験になった。ランドオペレーターが実際にホテルへ予約する時には、エージェントランゲージが必要であり、業務を遂

### 知識(エージェントランゲージ)が大事

行するあたり、とても重要で、ホテル業務や旅行業務では覚えておく必要があることが理解できた。また、ホテルへの予約を申し込む際、氏名や性別、国籍、年齢などについて誤った情報を入力してはならないということに改めて感じた。また、ガイド業務の手伝いでは、お客様の到着時間などをしっかり把握しておくこと、観光地に関する知識を正確にもっていることが大切であると感じた。  
(宮口香奈子)





海外で働くというこ  
とは、単なる旅行とは  
異なり、日本の文化や

### 現地社会への調和力の 必要性を認識

常識の通用しない土地  
で生活をするというこ  
とであるため、現地へ  
の柔軟な適応が大切で  
あると考えた。旅行で  
あれば相対的に短い期  
間であり、カルチャー  
ショックも旅行ならば  
はの体験と位置づけら  
れる。しかし、実際に  
現地で長期間にわたり  
生活するためには文化  
の違いを乗り越えて、  
現地の習慣と調和しな  
ければならないという  
ことを、プーケットで  
働く方々の体験談を通  
して理解できた。

(野田菜摘)

voice of the student



プーケット島のホテルで  
働く日本人の方々から話  
を聞くなかで、共通であ  
ったキーワードは「笑  
顔」と「思い立ったら行動  
して経験する」ということ  
であった。言葉が通じる・

### 大切なのは「笑顔」と「行動力」

通じないは必ずしも関係  
なく、笑顔でいれば印象  
や相手との関係性がよく  
なる。笑顔と行動力は、言  
語以上の共通語であると  
理解できた。三人ともプー  
ケットで働くまでの道は  
異なっているが、仕事を探  
し自ら海外で働くことを  
選んだという勇氣を出し  
て進んだ一歩が大きいもの  
であり、その一歩が現在の  
生活へと繋がっていること  
がよく理解できた。やる前  
から諦めて妥協するので  
はなく、何にでも挑戦す  
ることが大切であること  
を改めて感じた。

(吉川茉里)

voice of the student



まず、彼ら・彼女らに  
会ってみて、日本への愛  
着がとても伝わってき  
た。特に、現地の高校生  
にとつて、日本のアニメ  
が大きな存在となってい  
るのが身にしみてわかっ  
た。私たち日本人以上に  
日本のアニメに関しては

### 現地高校生との交流から 自文化を学ぶ

詳しいと言ってもいい  
くらいであった。今回、初  
めて海外の高校生と話し  
てみて、もしかまた今回の  
ような機会があってもい  
いように、日本のアニメ  
やそれ以外の日本文化に  
ついてもっと知っておく  
べきであると考えた。高  
校生が教えてくれるアニ  
メを、私が「知らない」  
というたびに、悲しそ  
うな表情をした高校生たち  
の顔が忘れられない。知  
識を持つことは、コミュ  
ニケーション能力の向上  
にもつながることがよく  
理解できた。

(小倉風野)



今回、プーケットで働  
く日本人の話をきいて、  
海外で働く上での大きな  
ポイントとして、異文化  
に自分を適応させるこ  
と、そして何よりも努力  
が必要であると考えた。

### 異文化適応能力の大事さを学ぶ

もし英語ができなかった  
としても、必死に勉強を  
すれば結果もついてくる  
ということを教えても  
らった。当然日本と海外  
とでは言語、文化、習慣な  
どが大きく異なる。そう  
したなかで、必要以上に  
母国と海外を比較しない  
こと、異文化に自分を適  
応させることが重要であ  
るとわかった。海外のみで  
はないが、働く上で「コミュ  
ニケーションを上手に取れ  
るかどうかが大きな鍵を  
握るので、コミュニケーション  
能力を高めなければなら  
ない」とも考えた。

(北澤沙弥香)

### 異なる学校システムを見いだす



プーケット島の高校生との交流から、英語(ないし共通の言語)がない環境下で自分の言いたいことを伝える難しさや、日本と全く異なる学校システムがあることを学んだ。

現地の高校生は、日本語を勉強しているものの、すべての生徒が流ちょうに話せるわけではなかった。日本語でコミュニケーションをとる時に、簡単な単語も分かりやすく伝えようとしても難しいことが多く、絵に書いてみたり、話を交えたりしてしまうのも大切であると学んだ。また、日本では通常給食が出るが、プーケットでは、現金をコインに変えて食事を買ったり、通常とは違う特別コースがあったりと、学校生活のなかの異文化を知ることができた。

(土田志奈)

### voice of the student

### 個性を肯定するタイの教育



高校生との交流を通じて、個性を大事することが大切であることを学んだ。「クラスの割合がゲイですよ」という先生の言葉を聞いて私はカルチャーショックを受けた。なぜなら、私自身はゲイの人たちに対して偏見はないが、日本の教育現場でそのような言葉は出てこない可能

性が高いからである。現地の子供たち自身もゲイであることを肯定的に捉え差別のない目で見るような子は見受けられなかった。子供たちがのびのびと育ち、個々の可能性を広げる為にはまずは自己肯定、自信を持つことが必要で、そのためには大人が子どもの個性を大事にしてあげることが一番大切であると改めて理解した。肌の色や性別が宗教が、色々な個性が認められる教育環境は改めてすばらしいと感じたし、日本社会ももっと見習った方がよいと考えた。

(當銘菜津希)

昨年度に引き続き、二〇一五年度も多文化コミュニケーション学科としてアジア祭に出席した。初参加となった昨年度



会場の全景

は「多文化マーケット」をテーマにして、学科の地域言語(アラビア語、インドネシア語、韓国語、スペイン語、中国語、ヒンディー語)に基づき、各地の市場を再現した。

今年度は、四月初頭に三年ゼミの時間を一部利用して学科実行委員を募集、前

# 学部行事報告

## 多文化コミュニケーション学科 アジア祭参加企画—多文化フェス2015

大塚直樹



曆の解説パネル

期中からテーマについて議論を重ねた。結果として、「多文化フェス二〇一五」をテーマに掲げ、地域言語に基づく、各地の祭りを再現することに決定した。また、昨年度の反省を踏まえ、単に展示するだけでなく、学生が展示内容に対して主体的に説明をおこなえるような工夫を





メキシコ「死者の日」の展示

スラーム圏（中東）では、祭りを再現するのではなく、ミニチュアモスクを製作した。  
 こうした展示以外には「なまえで多文化」の企画が好評を博した。具体的な内容は、アラビア語、韓国語、ヒンディー語に関して參觀者の名前を一枚の用紙に記載した。もちろん地域言語を履修している学生が名前の記載を担当した。



インド「ホーリー祭」の展示



中国「春節」の展示



「なまえで多文化」コーナー



中東「ミニチュアモスク」の展示

考えた。夏期休暇をへて後期に入って、他の学科学生へ協力を呼びかけつつ、アイデアを具体化してゆく作業に取り組み、準備を進めた。以上を踏まえ、アジア祭当日を迎えることになった。  
 今回、地域言語に基づく各地の祭りをとりあげるにあたっては、それぞれの暦がポイントになった。実際に再現した祭りの多くは、いわゆるグレゴリオ暦ではなく、旧暦とも呼ばれるローカルな暦に即して開催されている。したがって、展示教室に入ったところには、各地の暦について説明するパネルを設置した。  
 暦の解説を導入としつつ、順次地域別の祭りを紹介・展示した。具体的には、中国の展示が春節、つまり旧暦の正月である。南アジアはインドのホーリー祭、東南アジアはインドネシアのガランガン・クニンガンの祭りを再現した。さらに韓国ではチュソク、ラテンアメリカではメキシコの死者の日を取りあげた。最後に、偶像崇拝が原則禁止されているイ

来場者に協力してもらったアンケートでは「自分の名前をいろいろな言語で書いてもらえるサービスがよかったです。展示も丁寧につくられていてすてきでした」や「とても工夫されていて美しくレイアウトされた物を見ることができて楽しかったです。学生の方達の説明もわかりやすくなりました。皆さんフレンドリーですね」など、好意的な意見も



「なまえで多文化」の記入用紙



韓国「チュソク」の展示



インドネシア「ガランガン・クニンガン」の展示

国際関係学部の「今」がわかる

# 国際関係学部BLOG 更新中!



亜細亜大学 BLOG 検索

## 国際関係学部BLOGとは?

グローバル化時代を迎え、国際関係学部の研究・教育活動は日々変化しています。そうした「今」を発信すべく2013年3月に当ブログはスタートしました。

### タイムリーな発信に力を入れています!

国内外のフィールドワークやインターンシップ、ゼミ活動など、学生の経験を熱いうちに情報発信することで臨場感を伝えます。

### 今後にもご期待ください!

国際関係学部により関心を持ってもらうため、今後も学部独自の取り組みを紹介していきます。



### 視覚にうったえたい!

文字情報だけでなく、写真を多く用い、学部の教育活動をイキイキと伝えられるよう留意しています。

### 実は…更新しているのは教員です!

学部教員が持ち回りで更新をしています。

ブログへのアクセスはこちらから

Check!

<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/blog/>



来場者でにぎわう会場の風景

かつ参観者にも興味を持ってもらえるような企画を学生主体で立案してゆきたいと考えている。

みられた。次年度以降も学生がこれまで以上に「多文化」に対する知識を深め、



後片付け終了後の実行委員会の集合写真

付記…多文化フェス二〇一五は、その後、武蔵野市国際交流協会(MIA)との共催で、武蔵野ブレイス(公益財団法人 武蔵野生涯学習振興事業団運営)にて「多文化ミュージアム」と題した展示などをおこない(開催期間:二〇一六年二月一五日〜一七日)、地域社会の人びとの交流もはかった。

なお、多文化コミュニケーション学科で学べる地域言語については、次の大学ホームページに紹介されている。こちらも参照してほしい。  
<<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/multiplecultures/language/>>



執筆者紹介（五十音順）

## 大塚 直樹（おおつかなおき）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・講師。主な担当科目は、観光地理総論、フィールドワーク入門。

## 中野 達司（なかの たつし）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な担当科目は、体験で学ぶ地球環境論。

## 小張 順弘（こばりよしひろ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・講師。主な研究分野は、応用言語学・社会言語学(フィリピンの多言語状況など)。

## 新妻 仁一（にいつまじんいち）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な担当科目は、西アジアの社会と文化、アラビア語。

## 高山 陽子（たかやまようこ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。主な担当科目は、世界遺産論、テーマパーク論。

## 前川 輝光（まえかわてるみつ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な研究分野は、宗教学、インド研究。

**榎** 国際関係・多文化フォトジャーナル vol.03  
KaYa

2016年 3月31日発行  
発行：亜細亜大学国際関係研究所  
制作：株式会社キンドル

問い合わせ先  
**亜細亜大学国際関係学部**  
〒180-8629 東京都武蔵野市境5-24-10  
<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

本雑誌記事の無断転写を禁じます。  
©2016 Faculty of International Relations, Asia University